



地方独立行政法人青森県産業技術センター

内水面研究所

内水面研究所だより



第10号 平成24年8月24日発行

〒034-0041

青森県十和田市大字相坂字白 344-10

TEL 0176-23-2405

FAX 0176-22-8041

e-mail sui.naisui@aomori-itc.or.jp

HP http://www.aomori-itc.or.jp

新スタッフ紹介、職員の配置

【巻頭挨拶】



所長
伊藤 秀明

この4月より水産総合研究所から内水面研究所に異動となり、所長に就任しました。よろしくお願いいたします。内水面研究所には2度目の勤務となりますが、前は旧内水面水産試験場時代であり25年ぶりの勤務となります。

当時は一研究員としてサケ・マスやシジミ、分析業務を担当し、県内一円を走り回っていた記憶があります。今回は研究所を預かる立場での勤務となりますので気を引き締め、内水面漁業の振興のために職員一同で一生懸命取り組みながら、皆様の生産活動を支援できるような内水面研究所を目指したいと思います。

また、地方独立行政法人となって4年目となり、本年から来年にかけて第1期中期計画（H21～25）の検証を行ないながら、次期中期計画（H26～30）の中に今後の内水面試験研究をどう位置付けていくのかなど大事な時期となりますので、今後とも皆様方のご理解とご協力をお願いいたします。

【新スタッフです！よろしくお願いします】

4月の異動により新スタッフが4名配属されました。総勢10名の研究所にとっては、大きな異動でしたが、今後とも研究所職員一丸となって頑張りますのでよろしくお願いいたします。

【新スタッフ】

所長	伊藤 秀明（水産総合研究所より）
総括研究管理員	佐藤 晋一（水産総合研究所より）
主査	中村 平（三八地方漁港漁場整備事務所より）
非常勤事務員	佐藤 由香（新採用）



総括研究管理員
佐藤 晋一

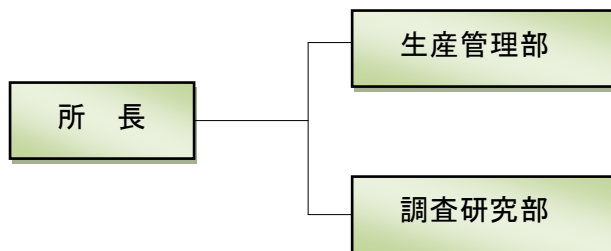


主査
中村 平

【転出者】

山口伸治（前所長 定年退職）、長崎勝康（前調査研究部長 県八戸水産事務所へ）
蝦名佳子（前主事 県病害虫防除所へ）、菊池美弥子（前非常勤事務員 任期満了退職）

【職員の配置】



部長：榊 昌文、主任研究員：前田 穂
主査：中村 平、技能技師：沢目 司
非常勤事務員：佐藤 由香

部長：佐藤 晋一、主任研究員：相坂 幸二
主任研究員：大水 理晴、技能技師 松田 忍



平成 24 年度新規事業の紹介

【 資源管理基礎調査（シジミ、ワカサギ） 】

全国トップクラスの漁獲量を誇り、本県の内水面漁業で最も重要な水産資源である「ヤマトシジミ」と「ワカサギ」の安定生産のために、十三湖や小川原湖で現在行なわれている資源管理措置の検証に必要な資源状況や漁獲状況を把握するための調査を行ないます。ヤマトシジミは調査研究部が、ワカサギは生産管理部が担当します。



トピックス、所内の動き

【 ヒメマス放流式が開催されました 】

6月22日（金）、秋田県小坂町にある十和田湖増殖漁業協同組合（小林義美組合長）十和田湖ふ化場においてヒメマスの放流式が行なわれました。当日は、十和田湖小学校児童や保育園児、漁協関係者等により平成23年度産の平均4.4gのヒメマス稚魚36万尾が放流されました。



放流式開会挨拶



小学生、保育園児による放流



放流されたヒメマス稚魚

【 愛魚週間開会式が開催されました 】

7月18日（水）、深浦町民文化ホールにおいて第48回青森県愛魚週間開会式が行なわれました。内水面漁業功労者表彰や絵画・標語の優秀作品表彰に引き続き、当研究所の佐藤調査研究部長を講師として「青森県の川や湖の自然と生き物」と題した講演を行ないました。また、開会式に先立ち追良瀬川ではヤマメの放流が行なわれました。



愛魚週間開会式



功労者表彰



講演



【 公開デーを開催しました 】

8月5日（日）、十和田市奥入瀬川河川敷において当研究所の公開デーを開催しました。奥入瀬川クリーン対策協議会主催の第29回奥入瀬川クリーン作戦（河川清掃活動）と協賛して行ない、研究所のコーナーでは普段見られないイトウ、イワナ、ヒメマス、スギノコなどの淡水魚の水槽展示やパネルによる研究紹介のほか、シジミ重量当てクイズ、シジミ釣りゲームを行いました。当日は、天気にも恵まれ約600名の参加があり大いに賑わいました。

公開デーの様子は、当研究所HPにも掲載しております。



展示コーナー



大型魚水槽展示



シジミ重量当てクイズ

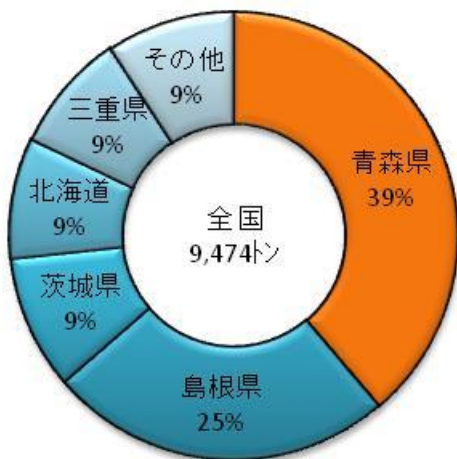


シジミ釣りゲーム

【 シジミ漁獲量が日本一 】

平成23年の青森県のシジミ漁獲量が3,672トンとなり、日本一となりました。本県産のシジミは汽水性のヤマトシジミで、主産地は十三湖や小川原湖です。

両湖では、これまで資源の維持・安定のために操業時間や漁獲量の制限、休漁日の設定などの資源管理を行なってきたおり、本県での漁獲量が増加したことやこれまで1位だった宍道湖での漁獲量が大幅に減少したことが要因です。当研究所ではシジミ漁業生産活動を支援するために、地元漁業関係者と連携しながら資源量や漁場環境のモニタリング、種苗生産技術開発を行なっています。



平成23年のシジミ漁獲量



ヤマトシジミ



ジョレンによるシジミの採取



わかりやすい魚病シリーズ (9) 【サルミンコラ症】

生産管理部 部長 榊 昌文

本誌 2 号では顕微鏡でなければ見ることができない数十ミクロンの小さな寄生虫を取り上げましたが、今回は肉眼でも見ることができる大型の寄生虫『サルミンコラ』を取り上げたいと思います。

【特徴と症状】

本症は養殖場や水族館で飼育されているサケ科魚類に多く見られる疾病です。

サケ科魚類にサルミンコラ属のカイアシ類が寄生することは欧米において古くから知られており、我が国では、ヤマメ・アマゴの鰓蓋内壁に寄生するのがヤマメナガクビムシ (*S. californiensis*)、イワナの口腔壁に寄生するのはイワナナガクビムシ (写真1: *S. carpionis*)、イトウの口腔壁に寄生するのはイトウナガクビムシ (*S. stellatus*) である (Naqgasawa and Urawa 2002) と報告されています。虫体は黄白色で成虫のサイズは 8 mm 程度 (頭部から卵囊末端)、肉眼で見られるのはすべて雌の虫体です。虫体は頭部にある『ブラ』と呼ばれる固着器 (写真2: 赤丸) を宿主 (魚) の組織に打ち込んで寄生します。ブラが打ち込まれた部分の皮膚は腫れるものの、軽度寄生ではほとんど無害ですが、鰓弁の先端部に寄生した場合は寄生部位が欠損し、鰓蓋の内側に寄生した場合は虫体と接触した部位の鰓弁が損傷するなどの影響があります。また、ニジマスに寄生した事例では、産卵を抑制したという報告もあります。

【対 策】

本症は重傷化すると摂餌が低下し痩せてしまうため商品価値が低下すること、鰓の損傷により死に至るなど、重要な疾病の 1 つでもあります。しかしながら、今のところ効果的な治療法はなく、ピンセットなどを用いて虫体を直接、魚体から摘出することが行われています。サルミンコラ属の養魚場への持ち込みは、他養魚場から寄生魚を生かしたまま移動することが原因と考えられていますので、移動する際には寄生の有無を確かめることが重要です。



写真 1 イワナの口内に寄生しているイワナナガクビムシ

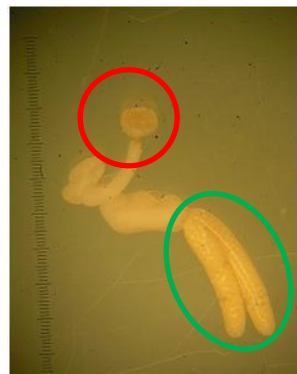


写真 2 赤丸部分がブラと呼ばれる固着器で魚の組織に打ち込む
緑丸は卵囊

参考資料：新魚病図鑑

編集後記

- ・本誌第 10 号が 1 ヶ月ほど遅配となったこととお詫びいたします。
- ・本年度の発刊は年 3 回を予定していますが、トピックスや所の動き、寄稿文を中心にした内容とし、研究情報については水産総合研究所と合同で発刊している青森県水産研究情報「水と漁」で提供いたします。

